

人生の答案

いったい何処へ行くの？ひたすら家の方へ

山城4回 下程 息

人間は成人すると共に自分の感性と知力で自分の生活について様々な角度から検討して「人生の答案」を出さねばならなくなる。ドイツの哲学者シュプランガーは、青春時代もつとも必要なのはこういう「内面的自覚」であると言っていたが、青春時代に主体的に目覚め、「自分はこの方面に進むのだ」と自分の道を選択することこそ、今後の人生の試金石となる。青春とはこういう「人生の答案」の作成期にほかならない。不世出の名シヨート吉田義男さんは、この「人生の答案」をもつとも早く見事に完成された一人である。小生の「人生の答案」と言えば、読書によって作成されてきたと断言したい。というのも、当時の大学は敗戦後の混乱によって過渡期特有の不安定な状態にあり、学生は放置されているに近い実状だったので、読書は文学部の学生であった小生には最高の勉強であり、最大の楽しみとなっていたからである。言語によって歴史、文化、人生が

新しい光で照らしだされてきたときに体験した、新鮮な驚きと感動は今も記憶に新しい。視野が広がり、世界を見る目が変わってきた。読書は自己形成と自己変革の契機となっていた。

ここでは非記しておきたいのは、今は夏目漱石の犀利な論評と国語教育の分野において出版界で健筆を振るっている、高校時代の同窓生水川隆夫君が同じ学部生だったという、天の配剤である。水川君の明晰な頭脳と鋭敏な文学的感性は当時の小生の羨望と垂涎の的であった。文学についての議論や雑談によって同君から得た様々な教示や刺激は、渴きを癒す泉となっていた。お陰で文学の面白さを覚えた小生は、ドイツ語を第二語学としていたので、ドイツ文学を専攻することに決めた。けれども、自分には水川君のような文学的才能も文章力もないことを知り、「名人が現れるのは制限という枠内である」というゲーテの金言に従って、小生は自分の性にあつた教師の道を「人生の答案」に選んだ。以来、分かっていない、否、分かるはずのないドイツ語やドイツの文学をさも分かったような顔をして誤魔化し、誤魔化しの「名人」になった頃に定年を迎えることができた。幸いなる哉！

以上のような教師人生の原体験となっていたのは高校時代と思う。この人生の薄明の時点ほど無鉄砲で未熟な時期はない。善よりもむしろ悪に誘惑されやすい。これほど先生方を困らす

時期はないだろう。幸いにも、山城高校には若い優秀な先生方が揃っていた。対等の友人として学生に接して下さり、胸のたぎる思いを存分に打ち明けることができ、手前勝手なことを言っても耳を傾けて下さり、反抗期特有の無軌道な言動も理解して下さった、若い先生方が忘れられない。いちばん面白かったのは、文学、芸術、歴史にかんする、教養ある先生方の放課後の雑談であった。刺激され受験勉強の合間を縫って文学書を読みはじめた。後の読書という独学の原点はここにあった。友人と喧嘩の瀬戸際まで議論をしたり、一緒に無謀な悪戯をしたのも、今は懐かしい思い出である。師友と本音で付き合えるのは、人生唯一度の高校時代の特典にほかならない。この特典こそは以後の人生の素地になっている。高校時代は人生という果実の新芽の段階と言えよう。「自分の半生の旅はこの早い出発点で決まる」という島崎藤村の言葉が胸を打つ。当時の先生方が小生の以後の人生に与えて下さった影響は甚大であった。懐かしさに胸がわく思いがする。小生の「人生の答案」は、遡及的に見るならば、高校時代に準備されていたと申したい。

著者略歴..

関西学院大学名誉教授（文学部ドイツ文学科）。

文学博士。

Johann Wolfgang
von Goethe
Werke



日本独文学会理事、(財)ドイツ語ドイツ文学振興会
理事を歴任。